



# みんなを一つにした あじまの家 改修プロジェクト

# 2

大工の棟梁、現場で教える

理工学部 建築学科 4年

**徳森 寛希**

理工学部 建築学科 4年

**菅沼 昂志**

（術）工作舎 中村建築 代表

**中村 武司**

理工学部 建築学科 准教授

**柳沢 究**

理工学部 建築学科 4年

**諸岡 徹**

1. Tokumori Hiroki
2. Suganuma Takashi
3. Nakamura Takeshi
4. Yanagisawa Kiwamu
5. Morooka Tetsu



## きっかけは、「サツキとメイの家」

柳沢究（以下、柳沢） 中村武司さんとの出会いは、10年ほど前。その頃は京都で設計の仕事をしていて、古い町家の改修などに携わっていたのですが、新しい材料を追加する時に色を合わせる必要があります。その過程をウェブサイトに掲載していたんですね。ちょうどその頃、中村さんは愛知万博の「サツキとメイの家」をつくっていて、新しい木材を古く見せるエイジングという作業に取り組んでいた。その古色仕上げ



©二馬力



1. あじまの家の改修現場で対談は行われました
2. モリコロパーク内「サツキとメイの家」※提供：中村武司
3. 「サツキとメイの家」の建築風景 ※提供：中村武司



について質問をいただいたのがきっかけでした。

**中村武司（以下、中村）**「サツキとメイの家」は新築なんです。昭和10年代の家に見せなきゃいけない。その方法をインターネットでいろいろ調べるところに、柳沢先生が書かれたものを見つけ、質問をさせてもらったんです。その時は、2度ほどやりとりをしたかったです。

**柳沢** その後、2012年に私は名城大学の教員になって名古屋に来ました。

**中村** その年の6月頃に建築ジャーナル誌に先生の研究室が取り上げられているのを見つけて、連絡を取らせてもらったんです。後で、お互いの子どもが同じ保育園に通っていることもわかり、縁というのは不思議なものだと思ったものでした。

## 現場を体験する、 貴重な機会を学生に

**柳沢** この「あじまの家改修プロジェクト」は、依頼主さんが私の町家改修の仕事を見て依頼してくださったもの。その際、できるだけコストをかせずに改修したいという希望があったんですね。建設はぜひ中村さんをお願いしたいと思ったのですが、予算的にアロの大工さんにすべてをお願いすることができなかった。そこで、学生が勉強を兼ねて作業に参加することを提案したんです。研究室の学生が中心となって、2013年7月から実測調査および改修計画の立案・設計を行い、2014年5月に解体工事に着手。現在は、中村さんの指導と協力のもとで、完成をめざして作業に取り組んでいます。

**中村** 私も名城大学の建築学科の卒業生ですし、来春から、名城の卒業生がうちで修業することも決まっています。また、大工として他大学で講師をし

たり、小学生を対象にした家づくりの講座にも関わっているため、職人以外の人と一緒に「つくる楽しさ」も知っているんです。

## 図面に描く線の裏側を知る

**徳森寛希（以下、徳森）** 僕は工業高校の出身なので、木材加工などは経験済みだったんですが、実際の現場は初めてで戸惑いました。

**諸岡徹（以下、諸岡）** 去年の夏に東北で、学生主導で集会所をつくるという木興プロジェクトがあり、それに5人の仲間と一緒に参加しました。実際に木を切ったり、ノミではぞ穴をあけたりという作業はその時に経験しましたが、この現場では比較にならないくらい多くのことを学んでいます。

**菅沼昂志（以下、菅沼）** 僕は、すべてが初めての経験です。ここに通うようになって、現場でしかわからない設計上の注意点がたくさんあることにも気づきました。設計に向き合う時の心構えなど、技術面だけでなく精神面でもいろいろ教えていただいています。

**柳沢** 設計図というものは、完成した姿を描くもの。その設計図通りに家をつくるために、何段階もの作業が必要なんです。この現場を体験したことで、学生たちは図面で描く線の裏側にある作業を知ることができたのではないかなと思っています。卒業してからも、こんな機会はなかなかありませんから。



図面で描く線の裏側にある作業を知ってほしい  
(柳沢 究)

**中村** 設計士と大工がお互いの立場を尊重すること。それがいい仕事をするための絶対条件なんです。図面は、言ってみれば共通のコミュニケーションツール。それを理解するために、お互いに学んでおかなければいけないことがたくさんあります。大工側が設計士さんの言葉を知らなければいけないのと同じように、設計士さんも大工の言葉を理解しないとけない。現場に出しまうと、知らないでは済まされないので、知らない大学ではそこまで学べないため、社会に出て一から勉強することになる。その点、こうして学生時代に現場を経験できるというのは、かなり画期的ではないかと思います。一歩進んだスキルを身につけるチャンスですよ。将来、必ずこの経験が生きてきますよ。

## 学校では学べない現場の魅力

**諸岡** 大工さんの言葉でまず戸惑ったのが単位でした。学校ではセンチメートルやミリメートルを使うのに、現場では寸や尺になる。慣れるまでは、頭の中でいちいち計算して、それが大変でした。



**徳森** 道具の管理についても勉強になりました。僕たちでは切れ味が悪くなっているかどうかかわからないし、研ぎ方も知らなかったのでも、研石の選び方から中村さんに指導してもらって覚えられました。

**柳沢** 最初の頃は動き方がわからず、学生はみんな、右往左往していましたね。だから私もできるだけ現場に足を運び、手が空いている学生に片付けや掃除の指示を出していました。何も言わなくても各自が自主的に動けるようになるまでに、少し時間がかかりました。



**菅沼** この現場は、うちの研究室以外の学生にも門戸を開いているんです。夏休みは他大学の学生も来ましたが、ほとんどが現場は初めてなので、言われなくてもできるという状態になるまでは、本当に大変でした。

## 1+1を3や5にするつながりのチカラ

**中村** 現場は、立場の違う人間同士で共同作業になります。それぞれが相手を尊重できるかどうか、とにかく大切。どんな仕事にも当てはまることですが、最終的には、人としてきちんとおつき合いができるかということが必要になりますね。

柳沢 中村さんと仕事をさせていただいて感じたのは、建築に対する考え方や価値観が重なるというところ。こういう関係だと、図面を挟んでやり取りしていても、非常に話が早いんです。なかには、現場で大工さんにおまかせしてしまう作業もありますが、考えていたものよりいいものが上がってくることもある。設計には、自分が設計して計算通りのものが出来る上がる楽しさと、自分が考えてもみなかったものが出来る上がる楽しさがあるんですが、後者はコラボレーションの醍醐味ですね。

## 大工は創造性のある仕事

菅沼 大工さんの仕事は楽しいですか。

中村 家業を継いだ頃は、確固たるビジョンがあったわけでは



ないんです。でも、いろいろな転機があって、職人をやっているのが楽しい、ものづくりが楽しい、考えるのが楽しい、と思えるようになってきました。「サツキとメイの家」の仕事を請けた時、不安はありましたが、それまでの職人人生のなかで、自分なりにつくってきた抽斗(ひきだし)を一つひとつ引き出しながら、上手につなげていけばやり遂げられると考えました。大工も設計士さんも、創造性のある仕事。今はこの仕事に就いて良かったと、心か

学生時代に現場を経験できるのは、画期的  
(中村 武司)



ら感じています。

徳森 柳沢先生に、「サツキとメイの家」を建てた大工さんに指導してもらえると聞いた時は、本当にいいのかなと心配になりました。でも、こうして指導を受け、家づくりを学んだことで、将来自分の家を自分で建てたいという思いが強くなりました。僕は公務員の内定をいただいているので、街を変えるプロジェクトにも挑戦したいです。

諸岡 自分で設計した家を建てたいという気持ちは僕も同じです。JR東海に就職が決まり、駅の計画や維持管理に携わることになると思うので、学んだことを社会のために生かしていきたいと思っています。

菅沼 僕は大学院に進学するので、社会に出るのはもう少し先になります。改修に興味があるので、柳沢先生からも中村さんからも、もっともっと学びたいですね。

## 街のために。そして、次の世代のために

柳沢 私は街をより良くするために、個々の建築に何ができるのかを考えています。日本の街並みが面白くない理由の一つが、歴史的な奥行きがないということです。現在、改修に積極的に取り組んでいるのも、スクラップ&ビルドではなく、古いものを残して街に奥行きをつくりたいからなんです。すこく新しい建物からすこく古い建物まで美しく共存した街、そんな生活環境をつくるのが夢ですね。

中村 私は、国産材を使って昔ながらの木組みの家を建てることを目的にした。「職人がつくる木の家ネット」というネットワークに参加しています。こういった活動やワークショップでの子どもたちとのふれあいを通じて、次の世代を担う人づくりに取り組むたいと考えるようになりました。幼い頃の経験は、人間形成に大きく影響します。夢のある大人になるためには、子ども時代が大切なんです。職人として新しさと伝統をつなぐとともに、子どもたちにもものづくりの楽しさを伝えたい。柳沢先生に負けず劣らず、夢はデカイですよ。

### Profile

中村 武司(なかもら たけし)  
有限会社工作舎中村建築 代表(理工学部 建築学科 1990年卒業) / 家づくりは、人づくりであり、関係づくりであるという信念のもと、次世代まで愛着の持てる家づくりに取り組む。代表建築に、愛知万博の「サツキとメイの家」がある。

### 柳沢 究(やなぎざわ きわむ)

理工学部 建築学科 准教授 / 一級建築士 / 調査研究や旅行を通じて、世界や日本の伝統的建築や民家建築に触れ、「人間にとって自然な建築と住まい」をテーマに建築に挑む。京都建築賞など、数々の賞を受賞。

